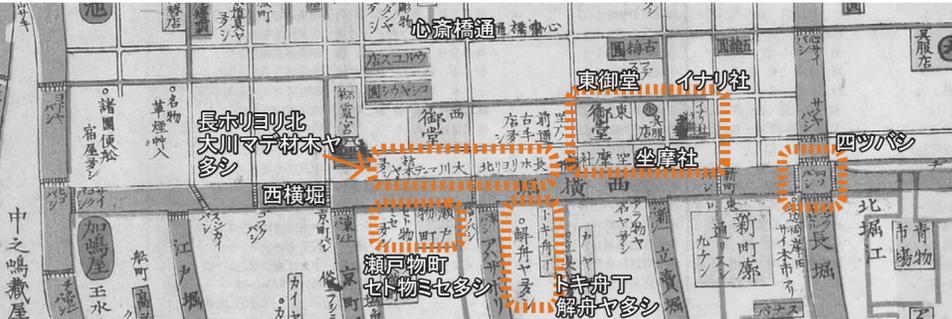


西横堀川跡界限をたずねて 商いのまち、大阪の源流へ

水運で発展した にしよこぼりがわ 西横堀川かいわい

八百八橋と呼ばれた大阪。しかし、水運から陸運へ、まちも大きく変化。西横堀川もその象徴です。



「浪華名所圖(ひとり)案内」より、時代は、天保年間頃(提供:つば善商店)

「昔、南船場は、順慶町、安堂寺橋通、塩町通、末吉橋通、そして横堀という5つの町名がありました。」と芦池連合振興会長の芝池会長のお話。「船場の町名を『まち』と読むことが多いです」とおっしゃっています。



変化してきたまちを語る芝池さん

西横堀川の東側は材木商が多く点在。戦後の多い時期は、86軒が軒を連ねていました。材木といっても、床柱や天井の仕材材など銘木を扱う店が多くありました。全国の銘木が集まり、各地に出荷され、材木の競りも、20年前(1990年頃)まであったとのこと。(右へ)

4つの橋が架かっていたから「四つ橋」です

四つ橋は交差点名や駅名ではよく知られていますが、西横堀川が埋め立てられるまで、本当に4つの橋が架かっていた！北は「上繫橋」、東は「炭屋橋」、南は「下繫橋」、西は「吉野屋橋」。川をまたいでぐるっと巡るように架けられていました。「摂津名所図会」でも名所として描かれています。夏の夜の涼みどころとして、絶好の場所だったとのこと。今現地を訪れると、四つ橋交差点の中央分離帯に、4つの橋が再現されています。



「摂津名所図会」の四つ橋(大阪市立図書館 蔵)

西横堀川の西側に市電開通

明治40~41年、市電が開通しました。下の写真は四つ橋の交差点から東側を見たところ。市電の開通、次の高速道路建設とともに近代化されるにつれ、馬車や大八車(だいはちぐるま)からトラックが中心になる等、流通事情も変わり、商売への影響が大きくありました。



四つ橋交差点から東を見たところ(大阪市立図書館 蔵)

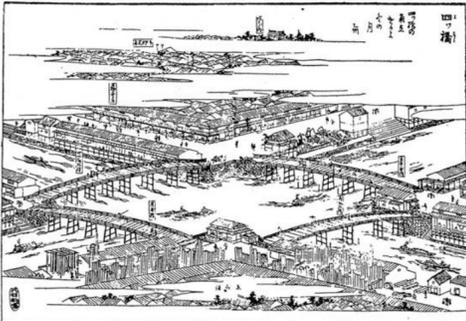
材木商や瀬戸物商でにぎわったまち

西横堀川跡の東側界限はビルが建ち並ぶオフィス街、通称「南船場」です。江戸時代より、全国の名産品が集まり、またそれを全国へ売りさばく、日本の商業、流通の中心でした。現在も多くの企業や商店が建ち並びますが、歴史をさかのぼると、その原点となった大阪町人の歴史がありました。昔からこの場所で暮らしたり、商売をされていた方々のお話からひもとくことができました。(左下へ)

一方、西横堀川西側は、延宝8(1680)年に、各地の陶磁器を扱う問屋が集まり、「富田町」と「南富田町」という町名から「瀬戸物町」という町名に改訂されました。その範囲は北は京町堀から南は信濃橋まで。明治の最盛期には、筋違橋から新町橋までの間に陶磁器商が集中し、その一帯が通称「瀬戸物町」と呼ばれていました。

「瀬戸物や材木を運ぶ船は『茶船』だったんですよ」と教えてくれたのは、西横堀川跡の西側に店を構える御崎さん(右下の「ちょっといい話」参照)。大阪港に停泊する大きな船から荷物をこまごま運んでいました。

材木店、瀬戸物店以外に、瀬戸物を入れる木箱をつくる店や茶船を修理解体する「解船(ときふね)商」もあり、地名に「トキ舟丁」(上図内)もありました。



戦後の区画整理、阪神高速の建設と埋められた西横堀川

戦後の区画整理で、瀬戸物商は全国へ分散しました。いくつのお店は留まりましたが、当時の面影は少なくなりました。材木商の多くは、摂津市島銅銘木町へ移転しました。中央区には、東横堀川と道頓堀川が残っていますが、水運で潤っていた堀も今は大半が埋められました。西横堀川が埋め立てられる前は、東西の行き来もありました。火防陶器神社西側の阪神高速道路の下に、西側へ抜ける小さな参道がありますが、これは高速道路ができる際、地元の要望があって残された参道です。

現在、西横堀川跡の東側界限は、アーティスティックなビルが建てられ、デザインを情報発信するなど、若者の間でも注目されるエリアになっています。

「昔は水がきれいで、泳いでたなあ」「シジミも採れたよ!」「埋められた川の跡は、今どうなっているんやろ?」阪神高速の建設等で、大きく変化してきた西横堀川跡界限。大阪町人の生き様や文化が現在のまちづくりへと受け継がれています。

都心のオアシス 御堂筋西側の寺社群

南船場のオフィスビルが建ち並ぶこの一角になぜ寺社が?それは大坂城築城の時代までさかのぼった歴史があります。

大坂城築城に伴って寺社が大移動

大坂城が築城された天正11(1583)年は、寺社仏閣が多数移転した年でもあります。「太閤さん」で有名な豊臣秀吉が大坂城周辺のまちを強固なものにするため、様々な寺社仏閣等を移転したのです。

坐摩神社は、大川の南岸、八軒家・渡辺の津(現在の中央区石町付近)から、難波神社は、大江の坂平野郷(今の天王寺区)から、この地に遷座しました。

坐摩神社

「坐摩神社」は「ざまじんじゃ、ざまさん」と呼ばれていますが、正式名をご存じでしょうか?正式な呼び名は「いかすりじんじゃ」と言います。「いかすり」の語源は諸説ありますが、土地または居住地を守り給う意味の「居所知(いかしり)」が転じた名称とされています。

さて、この坐摩神社は、神代(かみよ)の時代、神功皇后が新羅からご帰還の折り、旧淀川(現大川)南岸の渡辺の地にまつられました。この地は、全国の渡辺・渡部等の姓の発祥の地とも言われています。旧社地と伝えられる石町には、現在、行宮(あんぐう、御旅所)が鎮座されています。昭和20年の空襲で、本社も行宮も焼失しましたが、その後、再建。坐摩神社境内には、織維神社もまつられています。船場の織維のまちとして発展することを祈願しました。

難波神社と稲荷社文楽座

難波神社は「なぜ難波にはないのか?」とよく聞かれるそうです。今の難波は、もともと下難波(しもなんば)と呼ばれていました。難波神社があるこの場所は、上難波(かみなんば)でした。

難波神社境内には、稲荷社文楽座跡があります。人気のあつた浄瑠璃が一時急速に衰えていったのを蘇生させたのが植村文楽軒(うえむらぶらんくけん)という人でした。二代目文楽軒の時、難波神社境内にある稲荷神社に文化8(1811)年、小屋を構えました。

途中、天保の改革のおおりで中断もありましたが、明治4(1871)年まで続きました。江戸時代、船場は有力商人が集まっていたため、彼らが出資元となって人形浄瑠璃を支えたのです。

西横堀川跡界限のあゆみ

天正11(1583)年	大坂城築城の際、難波神社、坐摩神社が現在の地に遷座。渡辺姓発祥の地である現在の石町付近から坐摩神社とともに地名も移る
寛永5(1628)年	鍋島藩家づくられた瀬戸物が大阪に初めに入ってきた
延宝8(1680)年	「瀬戸物町」に改名
幕末の嘉永年間(1848~54)	灰喜山田喜八という人が、7月の地藏盆の折、自宅に祭る愛宕山將軍地蔵というお地藏様を浜(川岸)に安置し、行きかう人々に公開→せともの祭へ発展
明治元(1868)年	神仏分離令公布により地藏盆の廃止
明治6(1873)年	現在の信濃橋交差点付近に火防陶器神社が創建
明治40~41(1907~08)年	市電建設と開通のため、火防陶器神社が坐摩神社内に遷座される
大正11~12(1922~23)年	火防陶器神社が新造営され、翌年「火要鎮」のお札と陶製の瓢箪を授与
昭和20(1945)年	坐摩神社、火防陶器神社ともに戦災焼失
昭和26(1951)年	火防陶器神社が西横堀川西岸に再建。せともの祭復活
昭和30年代	西横堀川埋め立て。阪神高速道路建設
昭和46(1971)年	陶器商らの浄財で火防陶器神社が再び坐摩神社内に再建
平成元(1989)年	東区と南区の合併により、渡辺の地名がなくなると聞き、全国各地方より地名を残すよう請願し、地名が残る西横堀川西側の通りでのせともの祭が廃止
平成12(2000)年	坐摩神社境内にてせともの祭がはじまる
平成14(2002)年	「火防陶器神社のせともの祭」が大阪市無形民俗文化財として指定される
平成20(2008)年	

陶磁器でいっぱい、火防陶器神社

まず読み方。「ひぶせとうきじんじゃ」と読みます。そして場所は?坐摩神社境内にあります。明治元(1868)年、神仏分離令公布により廃止になったせともの祭を復活させると同時に、明治6(1873)年、火防陶器神社が現在の信濃橋交差点西側付近にまつられました。昔、陶磁器は梱包する際、藁を使っていました。そのため火事にならないよう、火の神様が必要でした。

明治40(1907)年頃、火防陶器神社は、市電開通のため立ち退かざるを得ず、坐摩神社境内に移りました。昭和20(1945)年には、坐摩神社とともに火防陶器神社も焼失。火防陶器神社は西横堀川西岸に再建されました。昭和46(1971)年、陶磁器商等の寄付と全国各地の陶芸作家たちの賛同を得て、火防陶器神社が再び坐摩神社の境内へ建立されました。火防陶器神社は、時代とともに場所を変え、人々の協力により受け継がれてきた神社なのです。

現在、せともの祭では茶碗供養があります。また、坐摩神社境内には、様々な陶器が飾られていて、美術館のように鑑賞を楽しめます。



今も残る「渡辺」という地名

坐摩神社が今の地に遷座した後、この付近は渡辺町となりました。平成元年、東区と南区が合併、中央区ができる時、渡辺という地名がなくなるというのを聞き、全国各地から地名を残すよう役所に要望し、坐摩神社内に地番で

「渡辺」と残りました。地名ではないですが、「渡辺筋」という名前も南船場に残っています。ちなみに坐摩神社の宮司さんは渡辺という姓の人が代々受け継いで、今の宮司さんは第58代目。

宮司の渡辺さん。古地図で詳しく説明していただきました

知って得する!地域情報

- 坐摩神社ホームページ www.ikasuri.or.jp/
- 難波神社ホームページ www.nanba-jinja.or.jp/

■せともの祭

・毎年7月21~23日頃、10~20時まで。坐摩神社境内で開催。全国の招き猫大集合や、ろくろ体験も。平成20年度に「火防陶器神社のせともの祭」として、大阪市無形民俗文化財に指定されました。(大阪市教育委員会のホームページに詳しく書かれています) www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/page/0000034276.html

耳寄りばなし 「火の用心」は「火要鎮」

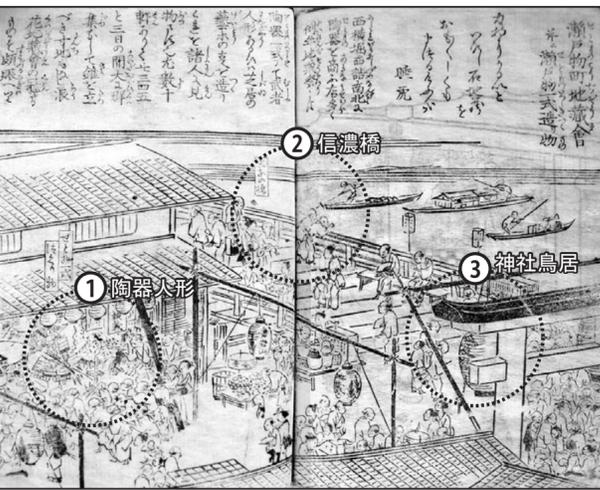
昔は木造家屋が多く、火災から建物や身を守るため、火防陶器神社の神様からお譲りいただく「火の用心」のお札。正確には「火要鎮」と書きます。有名な文人画家、富岡鉄斎が書いた文字です。幕末から大正年間を生きた文人画の巨匠で、日本の美術史に大きな足跡を残しました。明治時代、鉄斎と親交のあった火防陶器神社が「火防」の由緒に即していただいたのが、この「火要鎮」。以来、この書にご祈願をしてお守りとしてせともの祭でお授けしています。



せともの祭の祭以外でも、坐摩神社事務所で授かることができます

せともの祭と 町人のまちづくり

せともの祭からつづく、町人によるまちづくりの昔とこれからを紹介します



(「浪華時記-瀬戸物町地藏盆井瀬戸物一式造り」より 大阪歴史博物館 蔵)

町人、市民の力で祭りを復活!

一度廃止になりましたが、翌年の明治6(1873)年、現信濃橋交差点に火防陶器神社が創建され、「陶器商」という組合が祭を支え、復活。大正12(1923)年には、鉄斎の「火要鎮」のお札と、陶製の瓢を授与したと言われています。戦前の祭の範囲は、北は筋違橋まで、南は四つ橋まででありました。

戦後は陶磁器商人が中心に行っていました。昭和40(1965)年、中央大通開通により範囲規模が縮小されることに。次第に陶器店が少なくなり、通りのせともの市が坐摩神社境内に移されました。市電の開通、神社の戦災等がありましたが、町人や市民が支え合い、現在まで受け継がれています。

随筆家の岡部伊都子さん(~2008)は、西横堀川西岸で子ども時代を過ごし、「陶器祭」の様子を随筆に残しています。

ふるさと大阪の思い出のなかで、いちばん懐かしく濃い郷愁を覚えるのは、陶器祭である。からだ弱くて人出のなかに行くのを恐怖していた私だったが、陶器祭だけは、家の前が祭の通りであったため、じっとして祭が向こうから生活の中にはいつてきた。(大阪春秋 第7号「陶器祭」より)

西横堀川跡界限の ちょっといい話

慶応3年から続く歴史
今回の西横堀川について、様々なお話をいただいた「つば善商店」店主の御崎さん。お店は、何と慶応3(1867)年の創業だそうです。御崎さんは旧久宝小学校の出身。小さい頃から西横堀川とともに暮らしてきました。御崎さんの祖父にあたる創業者の御崎善右衛門さんは、「陶器時報」という新聞を発刊していました。それには、陶磁器のことだけではなく、その時代の新しい技術や流行についても書かれています。現在、瀬戸物町や瀬戸物に関する文章が出回っていますが、もとは「陶器時報」がもともとのこと。

陶器文化と商業

明治時代の初期は、水を溜めるための水壺が需要の中心でした。次第に、文章を書くためのインキ壺(明治30年頃)を多く扱うように。さらに、設計の青写真に使う文房具へと、時代とともに需要が変わっていきました。その他に、工業用陶磁器もありました。「新聞社に大きな墨汁入れを納品したこともある」とのことです。道修町(どしようち)の薬問屋に納品された菓子を煎じる陶製の壺も店内に残っています。

一つのお地藏さんがはじまり

この祭りは、一つのお地藏さんがはじまりだったのです。現鞠本町辺りで石灰(白くて堅い灰)を商っていた灰喜山田喜八という人が、7月の地藏盆の折、自宅に祭る愛宕山將軍地蔵というお地藏様を浜(川岸)に安置し、行きかう人々に公開したのはがはじまりと言われています。

それがとてもにぎわうということで、陶器商人も瀬戸物を売るようになり、せともの祭へ発展しました。江戸時代、大変にぎわいましたが、前述の火防陶器神社で紹介したように、明治元(1868)年、廃止になりました。

- 【図絵の説明】
- ①陶器人形:人形の横にお題「頼斎」の文字。背景画も見られます。
 - ②信濃橋:橋の上で夕涼み。ロウソクがあることから夕方から夜に催されたことがわかります。
 - ③神社鳥居:信濃橋北西角に当時神社がありました。

西横堀川跡西側通りでのせともの祭の様子

現在、坐摩神社境内で開催されているせともの祭は、平成12(2000)年まで阪神高速道路西側筋で開催されていました。写真はそのころの様子です。



珍しい大皿や華やかな壺が並んでいます(提供:大阪せともの祭実行委員会)

西も東も一緒に活性化を

「壺算」という落語を知っていますか?悪知恵が働く男が瀬戸物屋の番頭から安く壺を買わせるおもろい話。実は、瀬戸物町が物語の舞台となっています。御崎さんは今、「壺算」の落語会をこの地で行い、地域の活性化活動をしたと語られました。「西横堀川」界限で友人らとともに人集めをし、ユニークなことをしたいと考えています。若手も集まってほしいです。その活動は、「瀬戸物」というくくりでなく、いろんな分野の商店と一緒に、また西も東も一緒に、分野や地域を越えたものになればと思います



大正12年、火防陶器神社が坐摩神社内に再建された際、授与された陶製の瓢箪(つば善商店 提供)

